

～共に留萌地域の 未来を創る～

2024年9月17日(火)13:30～16:00

会 場：留萌市文化センター

参加者：約520名



【開会】

開会にあたり、主催者を代表して林留萌開発建設部長が挨拶し、第9期北海道総合開発計画の紹介をしました。続いて、上原留萌振興局長から北海道総合計画の紹介をしました。



林留萌開発建設部長



上原留萌振興局長

【基調講演】「留萌地域のポテンシャルを考える」

基調講演では、鈴木聡士北海学園大学工学部教授から、留萌地域の隆盛を動画で紹介いただいた後、再生可能エネルギー・食・観光の観点から、留萌地域のポテンシャルについてお話しいただきました。



北海学園大学工学部
鈴木聡士 教授



会場の様子

【パネルディスカッション】「共に留萌地域の未来を創る」

パネルディスカッションでは、4名のパネリストが自身の活動や地域づくりを話題に、今後の課題や将来について意見を交わしていただきました。



inakaBLUE代表/漁師
小笠原宏一 氏



留萌観光協会会長
佐藤太紀 氏



株式会社モンベル
常務取締役広報本部長
竹山史朗 氏



株式会社丸々田中青果
常務取締役
田中美智子 氏

【閉会】

開催地を代表し、中西俊司留萌市長から閉会のご挨拶をいただきました。



中西俊司留萌市長

【地域PRパネル展】

留萌開発建設部管内9市町村のPR資料をはじめ、北海道総合計画の概要、留萌開発建設部の共創の取組を紹介するパネル展を実施しました。



パネル展の様子

第9期北海道総合開発計画 キックオフシンポジウム実施概要

◎プログラム

○第9期北海道総合開発計画の紹介

○北海道総合計画の紹介

○基調講演「留萌地域のポテンシャルを考える」

北海学園大学工学部教授 鈴木聡士 氏

○パネルディスカッション「共に留萌地域の未来を創る」

☆コーディネーター 鈴木聡士 氏

☆パネリスト（五十音順）小笠原宏一 氏、佐藤太紀 氏、竹山史朗 氏、田中美智子 氏



【基調講演】「留萌地域のポテンシャルを考える」

①再生可能エネルギー②食と観光③交通結節点としての道の駅活用がある。100年に1度くらいの大きなチャンスが留萌地域にきている。再エネを活かすこと、観光・食・レジャーの街として情報発信を強化、生活に便利で快適なまちづくり（15分都市など）により、観光客にも住民にも魅力的な地域づくりを目指すことが重要。

【パネルディスカッション】「共に留萌地域の未来を創る」

＜課題とその対応＞

小笠原氏：（漁業改善プロジェクト等実施にあたり）合意形成が大事だが、困難な場面も出てくる。個人の温度差はありつつ、誰かが引っ張って動きやすいようサポートし、どう輝かせていくかが大事。

田中氏：（ニシン漬けについて）客層を考えると、アナログとデジタルの融合が課題。実際に商品を歴史とともに感じてもらう必要。そのためにはリアルで体験する必要がある、交通インフラは不可欠。

竹山氏：留萌の知名度を上げることが課題。拠点ができることにより人の流れが変わる事例も。来訪者だけでなく、地元利用されることが重要。

佐藤氏：人口減少、駅の跡地と道の駅の一体的連動、広域連携が課題。拠点間のネットワークづくりと交通ネットワークの形成が重要。人口減少への対応としては、定住人口（住みやすさ、レジャーなどの活用）、観光への攻め（消費人口増）、地域の守り手（雇用の確保、災害対応に必要な建設業）を考える必要がある。道の駅るもいは、来場者37万人をさらに増やし、まちなかへの人流を作り出す拠点のみならず、留萌100年に一度の転換期において地域づくりの起点として”コミュニティ・ハブ”として活用すべき。

＜地域の将来に向けて＞

小笠原氏：目指すのは田舎。コミュニティがありワクワクするような空間を作っていきたい。皆が地域のことを知り、前向きに挑戦する気持ちを忘れないことが重要。プライドを持って住み続けられる未来に繋がる。

田中氏：子どもたちが懐かしいという舌に残る記憶が大事。食育を通じて故郷の味を後世に残したい。外販は留萌の魅力を伝えるきっかけのフェーズ。留萌に来てくれる人を増やし大地に根ざした商売の仕方を続けたい。

竹山氏：全体をどう見せるかという視点も重要。訪問者にここは違うな、と感じさせるデザイン・センスのある地域になってほしい。

佐藤氏：税収を増やし、雇用、投資、資産価値の向上を考えたい。経済活動により増えた税収を公共投資し生産空間を維持するスパイラルアップを目指すべき。このような官民のサイクルが「共創」に繋がる。

佐藤氏：どこで何をやったかは記録に残るが、誰とどのように、という記憶に残る視点が必要。地域づくりに終わりはない。